

山間部の地域づくりと博物館活動の役割に関する考察：
ペイ・ド・ラ・ルドゥール・エコミュゼのケーススタディ

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-06-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 石川, 宏之 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10297/8692

山間部の地域づくりと博物館活動の役割に関する考察

—ペイ・ド・ラ・ルドゥール・エコミュゼのケーススタディ—

石川 宏 之*

1.0 本稿の目的

我々は、人が人や自然と共生する持続可能な世界を目指すために、地域社会において歴史的遺産を守り、世代間を越えた文化的な営みが必要とする。博物館⁽¹⁾は、その一つとして社会によって創られ、地域と関わりを持つ機関であるといえよう。そして地域問題に対処し、地域を生かし、さらに地域に影響を与えていくことも博物館のもつ社会的な役割の一つと考える。

今日、山間部の地域課題は、若者の都市への流出、地域住民の高齢化、地場産業の衰退、生活環境の再整備等である。これらの課題に博物館がいかに寄与できるのであろうか。今後、博物館活動を通じてこれらの問題に対処するには、まず博物館と地域住民の生活との関わり合いを明らかにすることを必要とする。この意味での博物館研究は、博物館をめぐる地域社会の視点から博物館活動を捉えた調査により、地域社会の課題に応える博物館運営について明らかにすることを求められる。

そうしたなか今日フランスを中心とするエコミュゼ (écomusée)⁽²⁾は、地域住民が博物館活動の主体となり、記憶とふれあう新たな地域文化の創造の場として注目されている。エコミュゼとは *écologie* (生態学) と *musée* (博物館) からなる造語である。エコ



図1 ペイ・ド・ラ・ルドゥール・エコミュゼの位置

ミュゼの「エコ (éco)」という言葉の由来は、ギリシャ語の「オイコス (Oikos)」からきている。「オイコス」は「家」を意味する。そして「家」というのは、何人かの人がそこで一緒に暮らす。つまり「オイコス」は、「家族・家庭」も意味する。ドミニック・リヴィエールは、エコミュゼを「人が住む環境界と、人がそれを保持している諸関係を自らのプログラムに組み入れた博物館である」と述べ (Dominique Rivière 1996, p. 60)、地域を活かし、その将来を準備する一つの手段としての役割を担っているとしている。

このような観点から本稿では、フランスの山間部で活動するエコミュゼの実態を把握

* 横浜国立大学大学院・工学研究科

し、地域づくりにおける博物館活動の働きや役割を明らかにしたい。そして日本の山間部におけるエコミュージアムを運営するうえでの手がかりを得ることを目的とする。

1.1 考察の方法

エコミュゼは、その地域・時代によって異なり常に変化していく。したがってエコミュゼの博物館活動は、今日の地域社会との関わりのみならず、時代背景の関わりの中からのどのような活動が求められるかを明らかにする必要があるであろう。

その手順として、まずフランスの博物館におけるエコミュゼの位置づけを行い、そして具体的にエコミュゼの事例から、博物館活動による地域づくりの目的を歴史的経緯の中で明らかにしたい。ついで博物館活動における調査・研究、収集・保存、展示・教育する機能が地域づくりにどのように働いているのかを明らかにしたい。

つぎに、あらためて博物館を構成する「もの」・「ひと」・「ば」とその設立過程から、エコミュゼの博物館活動と地域づくりの関係性を明らかにしたい。

そして最後に日本の山間部における地域社会の現状と照らし合わせて、それらの地域におけるエコミュージアムの役割やその運営方法の手がかりを求めてみたい。

1.2 調査概要

本事例における調査手法は、エコミュゼの現職員に、そのエコミュゼ全体における博物館活動や運営方法について聞き取りを行い、さらに、市民の代表者に、その博物館活動の現状について聞き取りを行った。⁽³⁾

調査地は、フランスにあるペイ・ド・ラ・ルドゥール・エコミュゼ⁽⁴⁾ (Ecomusée du Pays de la Roudoule : 以下ルドゥール・エコミュゼと略す) である (図1)。調査期間は1997年6月23日～25日である。

2.0 フランス博物館におけるエコミュゼ

フランスの博物館は、文化省のフランス博物館局 (Direction des musées de France) の管轄下にあるものと、そうでないものに分けられる。さらに前者では、「国立博物館 (Musée national)」・「指定博物館 (Musée classé)」・「統制博物館 (Musée contrôlé)」に分類されている (西野1995, pp. 9-11)。フランスにおける31のエコミュゼは、この統制博物館 (Ecomusée contrôlé par la Direction des musées de France) に属している (Alain Joubert. 1996, p. 29)。その統制博物館となる一つの目安として1981年に文化省から出された「組織原則 (エコミュゼ憲章)」は、エコミュゼに対する文化省の関与について述べられているものである (前田1996, pp. 90-94)。そして今日、ルドゥール・エコミュゼは、文化省から認められている統制博物館である。

2.1 ルドゥール・エコミュゼの範囲

ペイ・ド・ラ・ルドゥール⁽⁵⁾は、ニースの北西約70 km に位置するプロヴァンス・アルプ・コート・ダジュール地域圏 (Provence-Alpes-Cote d'Azur) のアルプ・マリティム県 (Alpes-Maritimes) とアルプ・

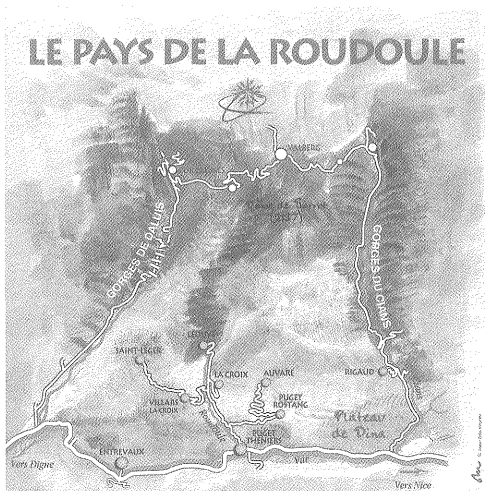


図2 ルドゥール・エコミュゼのテリトリー

ド・オート・プロヴァンス県 (Alpes-de-Haute-Provence) にまたがっている。具体的なそのテリトリーは、シアンズ谷 (Gorges du Cians)・ダルイス谷 (Gorges de Daluis)・バール谷 (Gorges de Var) に囲まれた範囲である (図2)。この地域は、人口が約3500人で、面積が約250 km²である。そして約2300 mの高い山々が連なる地域である。

2.2 ルドゥール・エコミュゼの設立経緯

昔からペイ・ド・ラ・ルドゥールに住む若者は、荒廃しつつあるこの地域を離れたいと考えていたという。なぜなら彼らにとって故郷が死への道をたどっていくことを目の当たりにするのは、耐えられないことだからである。しだがつて滅びる前に自分が村を離れたほうが良いと考え外に出ていったのである。こうした状況のなかで各コミューヌ⁽⁶⁾は、共同して緊急を要する地域社会の問題解決に取り組みはじめた。⁽⁷⁾

1966年、この地域に住む4人の兄弟は、地域住民に呼びかけ、「ルドゥールの友 (Les Amis de la Roudoule)」という会をつくった。その中に神父・警官・議員等の人々が加わった。この会の目的は、この地域が過去から受け継いできた文化遺産を壊さずに経済共同体として発展することであった。そしてその後20年の歳月を経て、1986年ピジェ・ロスタン村長のアンジュ・モーラン氏が中心となり、ルドゥール・エコミュゼを発足さ

せたのである。

2.3 ルドゥール・エコミュゼの目的と役割

このエコミュゼの目的は、自らの未来を準備するために過去から受け継がれてきた歴史的遺産を活かすことで、その地域や人々に輝かしい生活を与えることにある。そしてその役割は、地域住民がマイナスでしか考えられなかったペイ・ド・ラ・ルドゥールの自然と文化を生かし、地域にとってプラスのものへと転換することである。

このためのエコミュゼとしての博物館活動は、その目的を実現するために地域住民が主体となり、次世代へ伝えるものを調査・研究し、博物館資料を収集・保存し、展示を含めた教育を行っているという。そこで、どのような機構のもとでこうした博物館活動を通じての地域づくりが試みられているかを見てみたい。

2.4 ルドゥール・エコミュゼの機構

このエコミュゼは一つのアソシアション⁽⁸⁾から成り立っており、その会員数は約450人である。会員の内訳はペイ・ド・ラ・ルドゥールの住人が約50%、地域外の住人が50%である。また、このエコミュゼの年間運営費は、約50万 FF である。そして自治体から補助金をもらっている。⁽⁹⁾

このエコミュゼの機構は、近隣の9つのコミューヌを結ぶサークルの緩やかな連携からなっている (図3)。このエコミュゼで

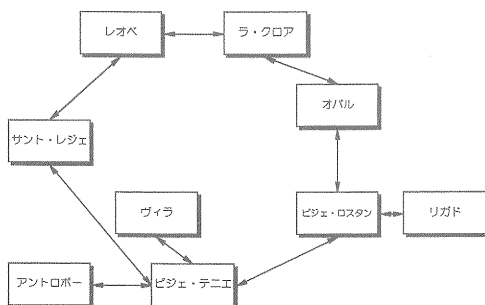


図3 ルドゥール・エコミュゼの機構模式図

	1858	1936	1962	1975	1982	1990
ピジェ・テニエ	1077	1271	1415	1438	1446	1703
オバル	105	62	10	14	36	37
ラ・クロア	388	195	105	102	69	81
ピジェ・ロスタン	176	71	24	70	85	115
リガド	—	—	—	111	141	165
サント・レジェ	120	87	62	23	40	54

表1 コミューヌの人口 (1858-1990年:人)

は、これらのコミュニティを「イル (île : 島)」と呼んでいる。イルは規模にかかわらず同等な立場である。¹⁰⁾

また、このエコミュゼでは、各テーマ別の委員会(教育・科学・文化等)をもっている。全体の会報は年に2回発行しており、他にテーマ別の会報を配布している。

2.5 調査・研究活動

このエコミュゼの課題は、再びこの地域に人々を集めることである。そのため「生きることは何か」ということを主テーマとし、あわせて「時」の観念を伝えていくことがねらいであるという。このために1986年、地域住民が主体となり、このエコミュゼの歴史的遺産の調査を行っている。

通常博物館を設立するにあたり、そこにコンセルバトゥールを赴任させることが義務づけられている。しかし、ルドゥール・エコミュゼではコンセルバトゥールを抱える十分な予算をもっていなかったため、しばらくの間、近隣の博物館に勤めているコンセルバトゥールに兼任してもらっている。地域住民主体の調査となったのは、住民による積極的な博物館活動の展開が当初から考えられ、採用されたには違いないが、一面ではこうした事情もあったという。

今日このエコミュゼでは、この歴史的遺産の調査結果を反映させて各コミュニティごとにテーマを設定している。例えばサント・レジ

ェでは、地域の歴史的遺産として「森林」・「蜂蜜」・「農業」がテーマとしてあげられ、現在、これに関する博物館を計画している。

2.6 展示・教育活動

(1) 人と道具の家

ピジェ・ロスタンにあるこの施設は、ルドゥール・エコミュゼの活動の全体を説明している。2000~3000点の主な展示資料は、主に地域住民から寄贈されたものである。

常設展示は、「時」を扱っている(図4)。テーマは、「自然の時」と「人の時」に分けられている。「自然の時」は100万年や1000万年という長い時である。また「人の時」の流れでは、100年や1000年単位である。この土地に住んだローマ人のことや、他民族の襲撃があったこと、国境が変わっていったという時の刻みを展示している。ピジェ・ロスタンにあった靴屋のアトリエを再現したものや、1920~1930年頃の農民の台所を再現したものもある。

企画展示は年に2回行われている。1997年は「ピジェ・ロスタンで生まれ育った女性の一生」というテーマであり、女性の仕事について展示している。

(2) 鉱山館

ラ・クロス周辺には、1860~1886年に開かれた鉱山があり、その坑道の全長は約5kmに及ぶものである。

鉱山館の発起人は、生物学者のギルバー

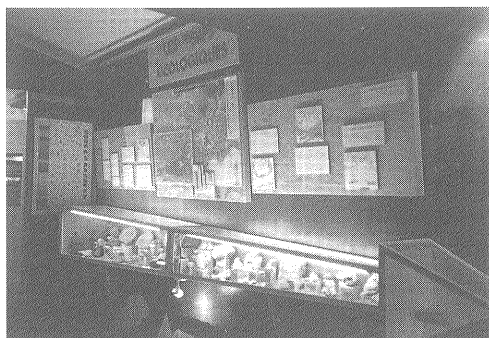


図4 「時」の常設展示

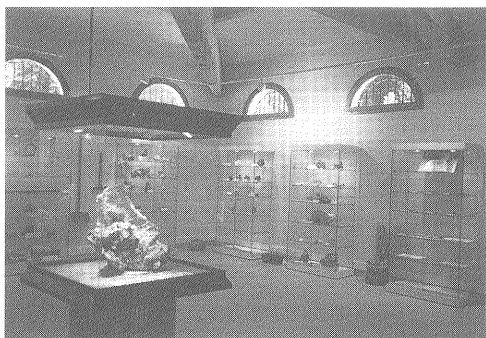


図5 鉱山館の展示室

ト・マリ氏である。展示には、真鍮が作られる過程や鉱山で使われていた道具等が展示されている(図5)。これらの資料は県議会・コムユース・文化協会からの援助金で購入されたものであるが、一部の資料は近隣の考古学博物館から譲り受けたものもある。また館内には、研究者用に宿泊施設を付属させている。この建物の運営はコムユースにより行われている。

(3) パンとオリーブの小屋

アントロポーはアルプ・ド・オート・プロバンス県に属し、町の名は「谷間にできた町」を意味する。この町は15世紀、城塞都市としてつくられ、現在の人口は960人である。その内175人が城壁内で、785人が城壁の外に住んでいる。

城壁外にあるパンの小屋は15世紀から今世紀中頃まで使われていたもので、農家の人たちが麦を持ってきて粉に引いていた。また、オリーブ油を抽出するための小屋は、15世紀から使われているものである(図6)。プロバンス地方で取れるオリーブは、フルーティな香りで10月から11月にかけて収穫される。村人は、現在でもここにオリーブを持ってきて、油を抽出している。これらの小屋は、コムユースの所有物であり、訪問者が来れば年間いつでも公開している。

(4) 山岳地帯の保全

近年まで村人は山間部を耕地にしていた。

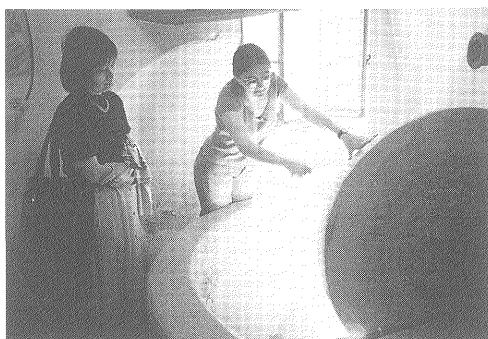


図6 オリーブ用の石臼

しかし、今日その耕地は、人々が村を離れることによって荒廃し、大雨により土砂崩れを起こしている。エコミュゼでは、この土砂崩れ対策を行っている。エコミュゼの会員は、地域住民に土砂崩れ防止用に作られた人工石の使い方を教えている。

また、山岳地帯にハーブやエニシダが生え、野生の猪や鹿・野兎が生息している。今日エコミュゼでは、多くの人々に自然の豊かさや大切さを知ってもらうために「森の小径」を設置し、森林の中を散策しながら植生について知識を得られるようにしている(図7)。

2.7 その他の教育活動

このエコミュゼは、ペイ・ド・ラ・ルドゥール内の学校に対して野外学習や展示会の案内を行っている。そしてこの地域外の学校に関しては、県の教育長宛てに通知を出して広報してもらっている。また大学生による調査等も受け入れている。

その他、このエコミュゼでは、7月4日に「星の夜空」という催し物を行っている。これはボランティアの人たちが中心となり、星空を見ながら音楽を聴き、昔の童話を語るといったものである。これは県議会・銀行・エコミュゼの協会・電話会社・文化省の協力を得て行われている。

2.8 博物館活動による地域振興

今日このエコミュゼの発足により、この地域を年間約8000人が訪れている。エコミュ

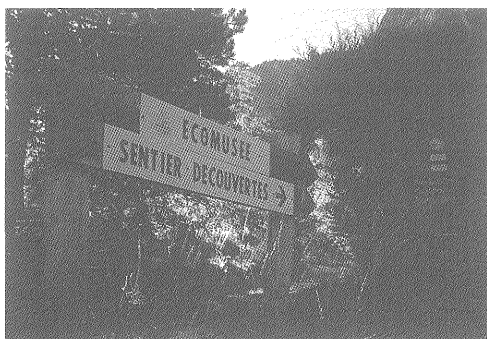


図7 森の小径

ゼでは、学校・観光局・企業のバカンス委員会等に働きかけている。

1997年、ピジエテニエに開館したメゾン・ド・ペイは、鉄道会社が所有し、運営している。このピジエセンターは、多くの観光客の足を止め、ペイ・ド・ラ・ルドゥールの歴史的遺産の素晴らしさを見てもらうことを目的としている。例えばルドゥール谷とバル谷の間に住んでいる職人や芸術家のリストをつくっており、その作品を展示販売できるようにスタンドを計画している。また訪問者にエコミュゼ全体の情報を提供するインフォメーション機能を持っている。そしてヨーロッパ内の観光情報関係の見本市が行われる時、エコミュゼのプロモーションを行っている。

2.9 今後の課題

現在、このエコミュゼでは地域住民がペイ・ド・ラ・ルドゥールの文化や産業に興味を持ち、共同で調査・研究を行っている。この調査が当面する課題としては、昔から住んでいた人たちが亡くなりつつあるので、その足跡を調べるのが難しくなっていることである。けれども最大の課題は、過去から受け継がれてきた歴史的遺産を活かしながらこの地域を再びよみがえらせ、これからの未来を築いていくこと、それが同時に経営的に一つの企業体として成り立ち、地域文化の保存が地域の活性化でもあり、地域経済に貢献できるものとするのが課題と思われる。

	もの	ひと	ば
公民館	—	社会教育主事	施設
図書館	図書館資料	司書	施設
博物館	博物館資料	学芸員	施設
エコミュゼ	自然・文化・産業遺産	地域住民 博物館専門職員	地域社会

表2 社会教育機関の比較

3.0 考察

ここで博物館の特性を見直し、エコミュゼの博物館活動と地域づくりの関係性について考察してみる。

3.1 博物館を構成する3要素

博物館は社会教育機関である。その機関とは、個人または団体がその目的を達する手段として設けた組織体である。そしてその組織体は、「もの」・「ひと」・「ば」から構成されている。特に博物館は、他の社会教育機関と比べると展示される「もの」として博物館資料を保持していることが特徴である(表2)。そしてその博物館資料に係わる「ひと」は、学芸員や地域住民である。またその「ひと」たちの活動する「ば」は、博物館資料の性質により美術館・歴史館・科学館・水族館・植物園・動物園・野外博物館等に分類された施設や地域社会である(図8)。

3.2 エコミュゼの「もの」・「ひと」・「ば」

エコミュゼの場合「もの」とは、自然遺産(山岳、河川、森林、動物、植物 etc.)、文化遺産(町並み、古城、考古遺跡、史跡、風俗、慣習 etc.)、産業遺産(農業、果樹園、林業、生産工場、鉱山 etc.)のような無形財・動植物財に及ぶ広いものである。

そして「ひと」は、主体となる地域住民をはじめ博物館専門職員や郷土史研究家である。こうした運営者の拡大は、エコミュゼが住民による博物館であることを表している。

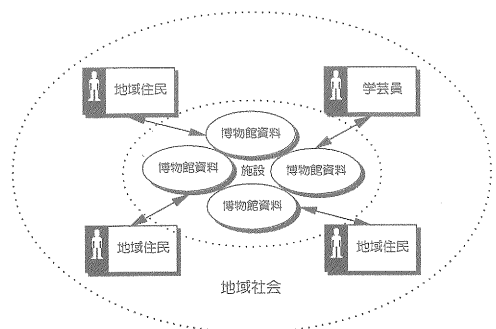


図8 「もの」・「ひと」・「ば」の関係性

また「ば」については、エコミュゼは必然的に複数の村や町、つまり複数の自治体にまたがり、その範囲については、その土地の歴史・民俗・地誌や自然環境などから決められた地域社会であることになる。なぜならこれらの遺産を保存・展示するにあたり、それぞれの時間の流れや空間をできるだけ本来の姿で存在するように試みられているからである。

3.3 博物館活動による博物館づくり

エコミュゼの博物館活動は、次世代へ守り伝える「もの」を調査・研究し、それを保存するために収集したり、その価値を多くの「ひと」に知ってもらうために展示を含めた教育活動を行うことである(図9)。そして博物館づくりは、地域住民をはじめとするより多くの「ひと」にこれらの全ての活動過程に参加してもらう「ば」を与える行為であると考えられる。

3.4 博物館活動による地域づくり

博物館活動による地域づくりとは、地域住民が主体となって地域に点在する遺産を目録化し、それらを保全していくプログラムでもある。また、各テーマを持つ博物館が地域住民の生活圏内に設立され、相互にネットワークを結ぶことで重層化された地域社会の生活を展示・教育していくことであると思われる(図10)。

3.5 日本の山間部におけるエコミュージアムの役割

以上、フランスのエコミュゼについてみてきたが、最後に日本のエコミュージアムと比較し、その違いについて考えてみたい。

今日の山間部における地域課題は、持続可能な地域づくりに向けて、従来のコミュニティを再編成することである。日本で構想されているエコミュージアムは、その地域住民による自然観察・郷土学習や地場産業の振興を目的とした地域づくりの手段として位置づけられている。¹¹⁾また地域を「まるごと生きた野外博物館」と捉え、そこに点在する歴史的遺産を活かしたまちづくり運動へと展開している。そしてこうした住民運動とフランスの住民参加によるエコミュゼの一つの手法とが結びつき、エコミュージアムづくりが推進されている。

フランスと日本のエコミュージアムの違いは、地域住民や自治体とパートナーシップを組んで運営を管理する第三者的な博物館専門職員が不在であることである。フランスでは、このような博物館専門職員は、博物館の専門性を活かした学習プログラムを保証し、それに継続性をもたせるために不可欠とされる。したがってエコミュージアムのディレクターは、博物館の専門性とともに行行政能力も必要とするであろう。

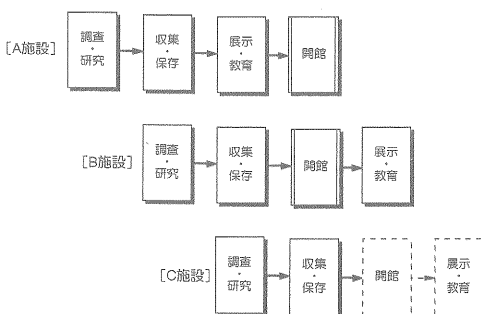


図9 博物館活動による博物館づくり

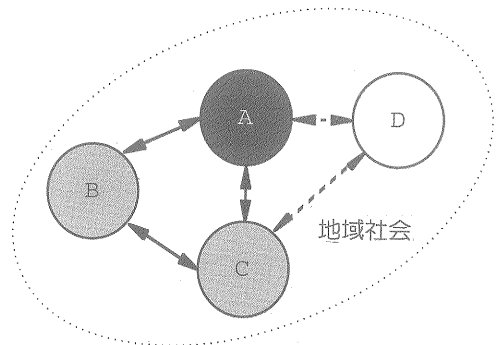


図10 博物館活動による地域づくり

こうした状況をふまえて、今後日本で設立されるエコミュージアムが、以下の4つの役割を担っていくことを期待したい。

① 歴史的遺産の調査・研究

エコミュージアムは、日常生活における良好な地域環境を保全するために地域に点在する歴史的遺産の調査・研究活動を行い、登録目録を作成すること。またその時、地域住民・民間企業・自治体とパートナーシップを組んで行うこと。

② 保全活動の策定・実行

エコミュージアムは、歴史的環境が断絶しないように近隣の博物館と連携を取り合って、歴史的遺産の保全活動の計画を策定すること。そして地域住民サイドに立った地域ぐるみの生活環境づくりに配慮し、支援すること。また、各館は地域住民がいつでも保全活動へ参加できるように窓口を設置し、その情報を共有化し、公開すること。

③ 人材を育てるための環境教育の実施

エコミュージアムは、地域住民に郷土愛を抱いてもらうように努めること。したがってより多くの人々にその歴史的遺産を知ってもらうために、高齢者と子どもたちが語らえる場を提供すること。そして子どもたちに「もの」の価値とその意味合いを知らせることで、感動とともに見る力を呼び起こし、身につけてもらうこと。

④ 地域振興

エコミュージアムは、その地域の歴史的遺産を広域的に位置づけ、より普遍的な価値を発見すること。そして地域住民がこの地域の歴史的遺産の価値を地域外の多くの人々に知ってもらうために働きかけること。しかしその結果、観光業の促進と雇用創出が中心となり一面的な商業化に陥り、地域住民の生活を脅かす状況になってはならない。

また、これから生まれてくる子どもたちがその地域の住民であることを誇りに持ち得るような地域としての価値の創出・確立が重要

である。経済的効果に期待するあまり商業化に陥り、地域住民にとっての社会環境を悪化させないために社会環境の調査・研究を行うことが重要である。

謝辞

本稿を執筆するに当たり、矢島國雄教授（明治大学文学部）に御指導を戴きました。また、吉兼秀夫先生（鮎環境文化研究所）には貴重な御助言を戴きました。ここに記して感謝の意を表します。

註

- (1) 本稿で定義する「博物館」は、博物館活動を行う機関である。博物館活動とは、調査・研究、収集・保存、展示・教育の機能である。したがって博物館は、バランスよく均衡のとれた博物館活動を行うことである。
- (2) 本稿において“エコミュゼ (écomusée)”は、1971年以後 Georges Henri Rivière の運動からなるフランス国内の博物館を指すことにする。1996年現在、「エコミュゼと地域博物館の連盟 (Fédération des écomusées et des musées de société)」に加盟している館は70である。その内フランスのエコミュゼは33館である。他は、フランスの地域博物館が33館、ベルギーのエコミュゼが3館、ベルギーの地域博物館が1館である（新井1996, p. 7）。つぎに“エコミュージアム (ecomuseum)”は、エコミュゼの思想が世界に伝播し、設立されたフランス以外のものとする。その理由としては、エコミュージアムは、国々の事情に応じて、その役割や位置づけが異なっているからである。
- (3) 調査は、筆者が鮎環境文化研究所の企画団体に参加し、通訳を交えて行った。なお聞き取りの質問項目は以下の4点である。
 1. ルドゥール地域の歴史と現状
 2. ルドゥール・エコミュゼの起源と特性
 3. ルドゥール・エコミュゼの運営方法
 4. ルドゥール・エコミュゼと自治体の関わり。これらのことをアンジュ・モーラン氏：ルドゥール・エコミュゼ・会長 (Président de l'Ecomusée du Pays de la Roudoule) をはじめと

する職員他3名、また高齢者の代表者としてレス・ミカエル氏と若者の代表者としてエリック・モーラン氏に対して聞き取り調査を行った。なお特にことわりのない限り、2.1~2.9のエコミュゼの活動に関する記述は、アンジェ・モーラン氏からの聞き取り調査によるものである。

- (4) 「ルドゥール」という言葉は、1960年代に、この地域を流れる「ルドゥール川」の名称からとって決められた固有な名詞である。地域に固有な名詞を付けることは、地域住民にアイデンティティを与える。
- (5) ペイ・ド・ラ・ルドゥールの「ペイ (Pays)」は、フランス革命以前から存在する独自の経済的・社会的・文化的な生活圏であり、旧州 (Province) を細分化した地域範囲である。この地域はイタリアとフランスの国境の村々であり、昔ニース伯爵の領地であった。これらの村々は、イタリアからフランスのバル県の農業地帯に行くときに通るなど、中継地点であり、また他民族の侵略から領土を守るための国境の城塞地帯でもあった。この地方の南側に大きな道路や鉄道が通ったので、今日多くの人々は、南方の町に行くようになり、山の上方へ誰一人行かなくなってしまった。このため、この地方はこの200年くらい、孤独な孤立した土地となってしまったのである。しかしそのおかげで今でも昔の文化が残っている。
- (6) 今日フランスの行政体制は、まず一番最小の単位を市町村 (コミューヌ: commune) とし、つぎに小郡 (カントン: canton), その上に95県 (デパルトマン: département), 県の上に22地域圏 (レジオン: région) となっている。
- (7) 1960年代この地域は、過疎の村になってしまった。1962年、ピジエ・ロスタンの平均年齢は64歳で、24人しか住んでいなかった。現在の人口は、115人で平均年齢は46歳である (表1)。
- (8) フランスに「アソシアシオンの契約に関する1901年7月1日法 (Loi du 1er juillet 1901 relative au contrat d'association)」がある。この法律は、いかなる人々やグループであっても非営利で自主的な協同体 (アソシアシオン) をつくることを法的に承認し、その公的有用性を認め、かつその活動を保証している。このアソ

シオンは、定款としてその名前、目的、手段、内部組織、その活動する人員の役割を明記し、公表することが義務づけられる。今日、ルドゥール・エコミュゼのアソシアシオンでは、4人を雇っている。その内3人が国や地域圏議会から一部援助金を支払ってもらっており、1人が兵役の代わりに働いている。会長・会計・秘書はボランティアである。

- (9) 1996年度の運営費は、519,097FFであり、その内52%の27万FFが自治体からの補助金である。その補助金の内訳は、アルプ・マリタイム県から14万FF、DRACから13万FFである。1995年度の運営費と比べると2.24%増加している (Albert Céloria 1996, p. 8)。ただし文化省からの補助金は、この中に含まれていない。
- (10) ルドゥール・エコミュゼに加盟している9つのコミューヌは、ピジエ・テニエ (Puget-Théniers), オバル (Auvare), ラ・クロア (La Croix), ピジエ・ロスタン (Puget-Rostang), リガド (Rigaud), サント・レジュ (Saint-Léger), レオベ (Leouvé), ヴィラ・ラ・クロア (Villars La Croix), アントロポー (Entrevaux) である。
- (11) その試みとして山形県朝日町で構想されている「朝日町エコミュージウム」は、地域住民と自治体が一体となって町の文化・自然や生活に誇りを持ち、これを生かしながら楽しく生き生きと暮らせる生活スタイルを確立するために推進されている (西沢1997, p. 131)。他に、文化庁による「エコ・ミュージウム」は、天然記念物の活用を促進させるために国が補助する整備事業として、国内6カ所で推進されている。(池田・蒔田1997, pp. 173-176)

引用・参考文献

- Alain Joubert. 「フランスから日本へ—エコミュゼ—」, 『エコミュージウム研究』, 1, 日本エコミュージウム研究会, 1996, pp. 29-37.
- Albert Céloria. *JOURNAL DE L'ECOMUSEE*, 16, Ecomusée du Pays de la Roudoule, 1996, p. 8.
- Ange Maurin. *Histoire du Pays de la Roudoule*,

- 1994.
- Ange Maurin. *à travers l'Ecomusée Pays de la Roudoule*, 1995.
- 新井重三「日本型エコミュージアムの未来」, 『エコミュージアム研究』, 1, 日本エコミュージアム研究会, 1996, pp. 6-12.
- Dominique Rivière. Un Ecomusée Français type; L' Ecomusée de la Bresse Bourguignonne, 『エコミュージアム研究』, 1, 日本エコミュージアム研究会, 1996, pp. 58-77.
- 藤原道郎・鎌田磨人・福田珠己「フランスのエコミュージアム—ロゼール山・エコミュージアムとグランドランド・エコミュージアムの事例を中心として—」, 『徳島県立博物館研究報告』, 6, 1997, pp. 1-38.
- 原輝史・宮島喬編『フランスの社会—変革を問われる文化の伝統—』, 早稲田大学出版部, 1993.
- Hubert Francois. "Ecomuseums in France—contradictions and distortions—", *Museum*, 37 (4), Unesco, 1985, pp. 186-190.
- Hubert Francois. "Historique des écomusées", Georges Henri Rivière, *LA MUSEOLOGIE*, Dunod, 1989, pp. 146-154.
- 池田啓・蒔田明史「天然記念物整備活用事業—エコ・ミュージアムの愛称をもつふれあいの場づくり—」, 日本エコミュージアム研究会編『エコミュージアム理念と活動—世界と日本の最新事例集—』, 牧野出版, 1997, pp. 171-184.
- 石川宏之「博物館運営における行政の支援と住民の役割—プレス・ブルギニョン・エコミュゼの場合—」, 『Museum Study 明治大学学芸員養成課程紀要』, 8, 1997, pp. 55-68.
- 岩橋恵子「フランスにおけるエコミュージアム運動の歴史的展開とその特質」, 『鹿児島女子大学研究紀要』, 17 (2), 1996, pp. 125-143.
- Kenneth Hudson. "The Dream and The Reality", *Museum Journal*, April, 1992, pp. 27-31.
- 倉田公裕・矢島國雄『新編博物館学』, 東京堂出版, 1997.
- 前田千世「エコミュゼに関する一考察—その背景と理念形成から—」, 『平成7年度修士論文お茶の水女子大学大学院人文科学研究科』, 1996.
- 西沢信雄「山形県朝日町のエコミュージアム—楽しい生活環境観—」, 日本エコミュージアム研究会編『エコミュージアム理念と活動—世界と日本の最新事例集—』, 牧野出版, 1997, pp. 128-149.
- 丹青研究所『ECOMUSEUM—エコミュージアムの理念と海外事例報告—』, 1993.

A Study on the Relationship Between Museum Activities and Political Activities —A case study on the Pays de la Roudoule Ecomusée—

ISHIKAWA Hiroyuki

The aim of this study is to manifest the relationship between museum activities and political activities at the Pays de la Roudoule Ecomusée. This paper will discuss the Ecomusée in the rural region. The Ecomusée is about 70 km northwest of Nice in France, and consists of nine villages. The Ecomusée builds up a network of villages that are called “îles: islands”.

This study found three significant features of the Ecomusée activities, and they are as follows: First, the Ecomusée activities are museum activities: collecting materials, preserving, researching and exhibiting collections, and promoting education. Second, the Ecomusée activities are protecting the regional heritage and exhibiting their life with a specialist, *conservateur*, and enhancing economic growth through cultural tourism. Third, the Ecomusée activities are creating a development project taking advantage of its heritage, and injecting new life into its region and people.

According to the results of these investigations,

- ① The Ecomusée activities make the whole communities to constitute living museums through listing of their heritages and preserving them.
- ② The Ecomusée activities are the methods to promote community lives by education. The education is given through exhibitions for which the Ecomusée cooperates with people. As a result, the Ecomusée has become a museum that has responsibility for its community and establishes the inhabitants' identity through its activities.

The difference between French écomusées and Japanese ecomuseums are that écomusées have the *conservateur*, but Japanese ecomuseums don't. Although Japanese museums have a specialist, *gakugeiin*, Japanese ecomuseums have not had it yet. I think that the following four roles need to be discussed so that Japanese ecomuseums should last for a long time. First, ecomuseums should cooperate with the inhabitants, private enterprises, and the municipal administration, when they research the regional heritage. Second, ecomuseums should make a plan for preservation of its heritage with a neighboring *gakugeiin*. It will be important to ensure that its heritage is handed down to the next generation. Third, ecomuseums should provide a lot of occasions for elderly people to talk with children and it is essential that children be taught to love their community where they live. Fourth, ecomuseums should help people its heritage as universal treasure.